



日本詩人選  
24

義堂周信・絶海中津  
寺田透

筑摩書房



日本詩人選24 義堂周信・絶海中津

昭和五十二年七月三十日第一刷発行

著者 寺田 透

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八  
電話東京二九一七六五一(代表)  
振替東京六一四一二三郵便番号一〇一一九一

印刷 明和印刷 製本 鈴木製本

©一九七二 寺田透

寺田透(てらだ・とおる)

文芸評論家。大正四年横浜生。東大仏文科卒。著書「寺田透・評論」「和泉式部」「無名の内面」ほか。

(分類) 1392 (製品) 13224 (出版社) 4604

## はしがき

十四年前義堂周信ぎどうしゅうしんについてはじめて書いた。まづ本があり、それを読み、それから書いたのはいつもの通りだったが、当時僕が関心を持つてゐたのは義堂そのひとではなく、中世の日暮れ時としての室町時代であつた。

能が成立し、水墨画が完璧の域に達し、太平記の編述された室町時代、幕府の三代將軍といふよりむしろ内大臣左大臣そして太政大臣としてあつた足利義満は、太平記にも登場人物として関係するが、能と水墨画には直接深い能動的関係を持つた人物である。ところが、義堂周信はこの義満の殊遇に与り、かれを禪の道にひき入れた禪僧として知られてゐる。

だからかれの詩文を空華集くうかしゅうによつて具こさに検討すれば、この時代の精神状況についてかなり深いことが知られるのではないか、さう考へたのであつた。

しかし当時道元に強く牽かれてゐた僕は、諸形とりませて一千七百三十九首にのぼるといふかれの詩と、序、説、記、書、題跋、雜著、疏、銘、祭文、跋などといふ諸文を読み通してみて、結局きはめて嫌いもの<sup>あきらま</sup>を味ははされた。

禅精神が薄弱だからである。

しかしその後、諸国の詩歌の中に詩精神のありかを探るといふ大それた試みをしたとき、禅とのかかはりからは取上げる必要があらうとも思はれなかつたその詩のうちに、詩としての吟味に耐へるものがいくつもあつたのを無視できず、かれを主人公とする数章の文をその中に入れた。

そのとき最初の機会にはまったく觸れることの出来なかつた絶海<sup>ぜつかい</sup>中津<sup>ちゆうしん</sup>が強い牽引力をもつて進み出、僕にその詩を、真の詩人の作品として義堂の作品に対置するといふ挙に出させた。

真の詩人の詩とはどういふものかを示すには、さういふ実例の呈示だけで沢山だと思はれてやつたことであり、その後、機会が与へられなかつたせゐもあるが、僕は絶海についてはたえて論ぜずに来た。

ところが今度、筑摩書房の日本詩人選の増巻分のうちに、このふたりに充てるべき一卷が企画され、その執筆のお鉢が僕のところ<sup>ところ</sup>に廻つて来た。

さうなると絶海についてほとんどまかつたく書いてゐないことが今更のやうに顧みられ、その

欠を補ふのは今だといふ気がした。

しかし義堂についてはとても新しく稿を起す気になれない。

そこで一計を案じ、義堂の方は、二種類ある旧稿に添削を施し、それを一つに纏める労をばらふに止め、主力は絶海に注がうと考へて、執筆の依頼に応じた。

だから実はこの本はうしろから書きはじめられてゐる。

しかしいざ絶海の詩文集せうげんかろ蕉堅藁せうげんかろに手をつけると、この禅人としても一風あつたらしい詩僧の作品が一体どういふ情況で作られたものか、気になることが往々にあるのに、それについて簡単に教へてくれる本が見当らず、僕は自分でその考証にかかづらひ、多くの紙面をそのために費やさなければならなくなつた。

かくて、関心の向ふ先は違つてゐるが、著者がここでとりあげ、評釈を加へる両詩僧の詩作品の相対的量は、多からぬなりにかなり均衡のとれたものになつた。怪我の功名である。

とは言へ、絶海脱稿のあと、義堂にかかはる旧稿の検討に入つたとき、多くの削除を適當とする unnecessary 部分、その後見知り読み知つたことに照らして、増補訂正を適當とする部分が少くないのを見出し、結局義堂の部もほとんど全部新稿となつた。この豫想外の事態がなければ、右に言ふ均衡も得られたかどうか。功名のための怪我は二重だつたわけである。

僕の旧稿を義堂に対する関心から読んで下さつた読者も、この本の前半を読んで、けし

て時間の無駄遣ひをしたといふ思ひには駆られないだらうといふことを明言します。

この本は題から言つても義堂と絶海ではなく、義堂・絶海で、ふたりは別々に考へられてをり、一方は倫理的な人格、しかし桜花を好んで詠ずる住持風の僧侶、一方は詩的人格、しかし行脚僧の面影をもつて宋元水墨画のやうな詩を作る、このふたりについて、詳細克明な比較をするのはもともと意図のうちになかつた。

だから、両者の文を考察するに当つてもそれぞれについて別の体のものを取上げるといふ不齊合なことをし、詩について言つても、義堂の題画詠は避けて通つたのに、絶海に対してはそれを構はず取上げて論ずるといふ偏頗なことをしてゐる。

しかし書中比較がましい言葉を書きつけた個所が少からずあるので、今、『日本漢文學史』(岡田正之原著、山岸徳平・長澤規矩也補)と、神田喜一郎氏の比較論を左に紹介し、僕の感ずると称する差異対照が僕一個の独断でない根拠を見せておきたい。

「義堂は道儀の高古にして、操守の厳格なるものあり。絶海は神秀超邁にして、懷抱の曠達なるものあり。義堂は学者的の態度を有し、絶海は詩人的の性情を帯びたり。故に義堂は学を講じ、道を論じ、孜孜として人を導く風あり。絶海は山水に放朗して、悠然自得の趣あり。絶海が詩を以て五山学僧中類を出で、萃を抜くものは、詩人的性格の然らしむる所なきにあらず。」

(岡田正之)

「五山に於ける古文は、虎關之を唱道し、中巖之に共鳴し、共に文辭の卓抜なるものあれども、虎關なほ禪門語録の氣呼を脱せざるものあり。中巖はなほ艱澁の体を免れざるものあり。義堂に至りては文辭富瞻にして、才氣縱横、純粹なる古文の域に達せんとす。」(同右)

ところが義堂の詩はこれほどは賞讃されず、賞揚は相對的である。一方絶海については、

「蕉堅藁中、律詩に專にして、古詩に闕け、縱横奔放の致を見ることを得ざるは、余の聊か遺憾とする所なるも、其の体裁の整ひて格力の雄なるものに至りては、五山詩僧の冠冕となさざるべからざるなり。」(同右)

「五山の文学の隆盛を極めたのは南北時代である。そうしてその前期を代表したのが虎關師鍊(こくわんしうれん)、雪村友梅(せつそんゆうばい)、中巖圓月(ちゅうがんえんげつ)の三人である。後期になるとその代表として義堂周信と絶海中津との二人(ごんごくわじ)が並び出た。ともに詩文にすぐれたが、とくに義堂周信は文に長じ、絶海中津は詩に長じた。

義堂周信の文と絶海中津の詩とは、おそらく五山文学の最高峰をなすものといつてよからう。」  
(神田喜一郎、「五山の文藝」)

「『絶海の』『多景樓』の詩に至つては、おそらくわが国に漢詩あつて以来の絶唱といつてもそれほど過褒ではなからうと思う。」(同右)

「義堂周信は絶海中津に較べて、その詩才はいくらか劣る。そのことは江戸時代の漢学者江村



北海が日本詩史の中に指摘している通りである。それに義堂周信は中國に留学する機会をもたなかった。これもその作品に絶海中津の作品に見るような清新の気の乏しい一つの原因かと思ふ。(中略)しかし、それは主として詩について言われることで、文章になると少しく事情が異なる。文章は或る程度学問と努力とに依るものがあるからである。義堂周信の文章は、さすがに立派である。その意味において義堂周信は虎關師鍊に比すべく、絶海中津は雪村友梅に比すべきであろう。虎關師鍊も中國に留学しなかつた人である。」(同右)

岡田、神田両氏がともに筆端にのぼせた中巖圓月に関しては、偶然、ここ一兩年のあひだに少々読みかつ考へる機会を持ち、その数理にたけた思想家としての一面はあるところにするに書いたもので、ここでは詩人としての片鱗を、その東海一漚とうかいいちおしよ集中の作品を引いて義堂周信に関する旧稿の一部に象嵌するとともに、絶海中津の作品を論ずるついでにもあへて引いて比較対照の資とすることにした。

さて義堂絶海ふたりの詩篇の數量上の比較だが、岡田正之の計算では、前者が、七言絶句一千三首、七言律詩四百五十首、五言律詩一百九十三首、五言絶句五十六首、四言詩一十二首、六言絶句一十一首、古詩七首、歌三首、五言排律二首、七言排律楚辞各一首、通算、さきにすでに言つたやうに一千七百三十九首、これに対して絶海にあつては、七言律詩六十七首、七言

絶句五十二首、五言律詩二十六首、五言絶句十五首、四言詩五首、計一百六十五首である。

天才に多作は免れがたいといふ言葉があるのを考へると、絶海の作品がこれだけなのはいかにもすくなくすぎるが、その詩文集蕉堅藁に明の天竺寺如蘭が寄せた跋文の紀年「大明永樂元年癸未」（一四〇三年）に注目すると、作者の死の二年前藁本はすでに明に渡つてゐたことが分るので、弟子鄂隱慧齋編の藁本には違ひないものの、作者も当然これに目を通してをり、少くも部分的に作品の取捨にかかはつたに相違なく、要するに蕉堅藁は作者の自選詩文集の性格を持つものとするべきだらう。

だから作品の数が少い、そこにみづから詩人とした中津の矜持を見るべきだ、とさへ言へると思ふ。

たださうすると、韻律上の規則がことの他やかましいとされる七言律詩の作例において、大抵のひとが詩人としては上だとし、傳記が語る通り漢字の音韻に對する現地体験が九年にも及ぶ絶海にかへつて破格なことが多く見出され、韻を履まないことも屢々あるのはなぜかといふ疑問が起る。

それを、あまり濃厚強烈でない詩情と、詩法の嚴正を貫く努力のひとつであつた義堂に對する絶海の特徴と見ていいのかどうか。

残念なことに、そのやうな問題になると中國音を解しない僕は、本文の中でもときどき苦衷

を漏した通り、論を立てる資格がないのである。

目次より前に実を告げておく。

使用した原典は明治三十九年一月発行、上村觀光編『校訂五山文學全集詩文部、第二輯』。しかし訓み方はかならずしもそれに従つてゐない。

参考書として第一に挙げるべきは辻善之助編著『空華日用工夫略集』(昭和十四年四月、太平洋社)、これはこれなしには本書など成立したかどうか分らない位の本である。次いで辞書ではあるが、中國の熟語、人名、地名、故事の記載に豊富な諸橋轍次著『大漢和辭典』。これも同種の参考書だった。他に本文中に名を挙げなかつたものとして、東京帝國大學史料編纂所編『讀史備要』も重宝したものととして挙げておくべきだらう。

また王雲五編『索引本佩文韻府』はいぶんいんぶを持つてゐたのも心強かつたことを記しておく。

しかしいふまでもなくこれらは当座特に重宝したものといふだけのこと、物心がつき文字を知つて以來読んだ本のすべてが参考書だったのは、今度もまたいつもと同様である。

一九七七年四月二十五日

著者

目次

はしがき

一

義堂周信

一 その人

三

二 その情

四

三 その文

五

四 その詩

六

絶海中津

一 略傳並びに文

三三

二 五言律詩

一七

三 七言律詩

三五

四 絶句並びに銘

三六

義堂・絶海略年譜

三七

蕉堅、錢原、鷹巢、東營秋月に関する

補足訂正を兼ねる奥書き

三〇一

義  
堂  
周  
信



## 一 その人

義堂周信は、日本禅宗を美学化した張本と僕には見える夢窓疎石の弟子、五山文学の高祖のひとり、絶海中津とともにその一二にゐるとされる臨濟僧である。精しく言へばその法の上の真の師は龍山徳見、文学上の師は中巖圓月だといふが、さういふことを調査断定する力にはないのしばらく措く。ただかれに対する足利義満の帰依があつく、義満は義堂によつて禅に近づいたのだとする辻善之助の説は、空華日用工夫集康暦二年十月十一月の記事によつて確めることができるので、これは書いておいてもいいだらう。

傳によると義堂は正中二年（一三二五年）、土佐の国高岡に生れ、幼いころから村僧について道を学び、儒書を習ひ、十四歳のときすでに薙髮の上上京、比叡山で登壇受戒した。その年すぐ生国に帰つて密教を修め、のち十七歳のとき大僧として叔父に伴はれてふたたび上京、かね



て欽慕してゐた夢窓疎石を臨川寺に拝し、弟子となつた。夢窓の死後は建仁寺の龍山徳見に依つたが、延文四年（一三五九年）關東管領足利基氏の求めにより、かつは春屋妙葩しゅんのかうはのすすめもあつて、夢窓の法勢をひろめるために東下、初め圓覺寺にゐ、のち佐竹義宣の招きに應じて常陸の勝樂寺に赴いた。一年後、鎌倉に戻り、圓覺、瑞泉に留錫したあと、貞治五年（一三六六年）善福寺の住持となり、転じて瑞泉寺、保壽院等を司つた。その後應安四年（一三七二年）上杉能憲の創建に係る鎌倉の西報恩寺の開山第一世に請ぜられた。康暦元年（一三七九年）義滿の請ひによつて京に帰り、建仁寺、ついで等持官寺の住持となり、六年後の至徳二年南禪寺に遷つた。義滿が翌年の秋、京鎌倉の禪寺の序列を改定する序に、南禪寺を五山の上においたのは、かれの義堂に対する帰依の篤さを証明してゐると言はれるが、他にも事情のあつたことで、義堂は六日後には寺内の常在光院に退いた。本朝高僧傳以下の説くやうにこのときただちに慈氏院に入つたのではないらしい。

一体五山といふのは、インドで釋迦牟尼しやくかむにの説法が行はれた五つの主な精舎、給孤獨園（祇園、松林などともいふ）、竹林、その他三ヶ所に因み、南宋の寧宗が定めたとされる中國の五禪寺、すなはち杭州臨安府徑山興聖萬壽禪寺、同臨安府北山景德靈隱禪寺、のち道元が修行得道した明州慶元府太白山天童景德禪寺、杭州臨安府南山淨慈報恩光孝禪寺、明州慶元府阿育王山廣利禪寺を龜鑑とする寺院の位階で、日用工夫集によると永徳二年（一三八二年）五月七日、義堂は